
ダークソウルの最後(闇の王編)

スパミリオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダークソウルの最後（闇の王編）

【Nコード】

N7322Z

【作者名】

スパミリオン

【あらすじ】

ゲーム、ダークソウルの主人公である不死者の男の話。ダークソウルの最後を想像した結果出来上がった作品NO.2
ダークソウルを知っている前提で書いていますから、知らない人には意味不明になってるかも。

男はただ“彼女”のために！

望んでなった訳ではないのに……不死者になった男は人々に嫌われ、気味悪がられ、叩かれ、斬られ、息の根を止められた。

しかし、何をしたらって死ななかった男は不死者専用の牢獄。北の不死院に閉じ込められた。

何故か簡単に脱出できたが……。

男にとって自分以外は敵になった。自分以外はどうでもよかった。自分さえ良ければそれで良かった。彼女に出会うまでは……。

不死院を脱出した男は、呪われた地と言われるロードランにたどり着き、不死者の使命とやらを聞き、やることのない男は暇潰しにそれをやることにした。

初めは、二つの鐘を鳴らす事すら出来ないアホしかいないのかと思っただが、すぐに難しい理由が分かった。

数は少ないが強力なデーモン。そして、自我を失って亡者となった大量の不死者達。

しかし、それを理解した男は思った「これは、良い暇潰しになるな」と。

アツサリとは行かなかったが、二つの鐘を鳴らした男。目的が消えた男。暇になった男。

無気力になった男は、とりあえずロードランのすべてを回るつもりで、運命的な出会いをはたした。

地下にあつた鐘の近くで隠し扉を発見。そこで“彼女”に出会った。

“彼女”は目が見えないようだった“彼女”は動けないようだった“彼女”は何故か男を姉さんと呼んだ。

“彼女”に一目惚れした男は“彼女”のために危険なデーモンをすべて殺す事にした。“彼女”のために亡者達も処分したかったが、不死者の殺し方が分からないのでそちらは諦め、ロードランの各地を回った。

各地を回り、自然と集まった人間性を“彼女”に捧げる。理由は不明だが、人間性を得れば得るほど“彼女”の体調は良くなっているらしい。

ある日。デーモンを殺した後で自称世界の蛇とやらに出会った。色々長々と勝手に語りだしたので、男は話の中身をすべて理解は出来なかったが、良いことを聞けたと喜んだ。

最初の火とやらが消えかけたから男は……正確には男を含む人々は不死者になつたらしい。つまり、最初の火とやらが復活すると、男は不死者では無くなる可能性がある。

更に“火を継ぐ”とは、自分自身を最初の火に捧げる事。

良いことを聞けたと思つた男は、前にあつた巨人の事を思い出す。各地を歩いて来た時に出会つた巨人は、最初の火が消えたら大変だから「世界のために火を継いでくれ」と色々くれたが、男を生け贄にするつもりだつたようだ。

とりあえず長々話す変な生き物。カアスと名乗つた生き物の力を借りて最初の火の近くに男は行つた。

そして、封印の扉をなんとか開き奥に進むと、道を塞ぐように立つ黒騎士達を殺して武器を奪い、先に先にと進んで最初の火にたどり着いた。

今にも消えそうな火の近くにいたのが、火を継いだ古の王だろう。

カアスの話しでは、カも残り少ない脱け殻と聞いたが、かなり強かつた。まあ、不死者の前には無駄な抵抗に過ぎなかつたが。

何度も殺される男だつたが、殺されるより速く、確実に、最低一本黒騎士達から奪つた剣か槍を突き刺す。ただ、それを相手が死ぬまで繰り返すだけだつた。

しばらくして、王の体に刺さる剣の数が十に届くころに王が倒れ、簡単に倒れた王に少し拍子抜けをしたが、気を引き締めてここに来た理由を思い出す。

「最初の火とやらを消す」

男は王の体に刺さった剣達を回収し、更に王の使っていた大剣を拾った。

そして、王との戦闘前に見付けていた、かがり火に似た最初の火に近付き、黒騎士からもらった大斧を地面に突き刺し、足下の灰をひっくり返して最初の火にかぶせてみた。

「消えないな」

見た目は今にも消えそうな最初の火だったが、灰をかぶっても消える事はなかった。

それではと大斧を握り直し、少し離れて助走をつけた男は、飛び上がって全力で最初の火に大斧を叩き込んだ。

「な!？」

とつさに大斧を手放して最初の火から離れる男。

大斧を手放して最初の火から離れた理由は、大斧に火が移ったからだ。

「なんだこれ？」

最初の火に突き刺さった大斧は、すでに柄も含めてすべて炎に包まれており、燃える部分など少しも無い大斧が燃えている現状は、

最初の火に近付くだけで強制的に“火を継ぐ”という事になる可能性をしめしていた。

「これは恐ろしいな」

消し方の分からない最初の火は最初見た時よりも激しく燃え上がっており、炎に包まれていた大斧は気が付けば小さくなっていて、しばらく静かに見ていると、最初の火に消化吸収でもされたかのように跡形も無くなっていった。

大斧が消えるのを見終わった男は、わざわざここまで来たのにあっさりとも最初の火を消す事を諦め、来た道を歩いて戻りだした。

封印の扉を閉め直し、何故か頭を下げる“大量”のカアス達のアチを潜り、カアス達の話を書から左に聞き流して外に出ようとすると、1人（一匹？）のカアスが男に紫色の何かを纏う手袋のような物を押し付けてきた。

「？ なんだ？」

「それはダークハンドと言って、お主ら闇の者にしか使えぬ武器だな、人から人間性を奪う事が出来る。我らが産み出した闇の武器だ」

「はあ…」

男が気の抜けた返事してカアス達を見上げると、先程ダークハンドを押し付けてきたカアスが1振りの剣と、どこかで見た事がある鎧一式を差し出してきた。

男にとって武器とは手足の延長線でも一緒に戦う戦友でもなく、

使い捨てできる得物に過ぎないので、貰えるというのならたとえ刃が折れた剣でも貰う。

そういう訳なのでカアスが差し出してきた武器を素早く仕舞い、今度こそ外に出ようとしたら、まだ用があったカアスが話しかけてきた。

「その剣と鎧も我らが産み出した武具だが、別に特殊な効果はない」

振り返った男はそれを聞き「なら、引き止めるなよ」と思ったが口には出さず、前に向き直るとカアスが更に話しかけてきた……が、男は何かを言うカアスの言葉を背後に外に出た。

「我らカアスとフラムト。闇の王に……」

カアス達の話を見殺した男はその足で直接“彼女”の元には向かわず、少し寄り道をして人間性を集め、もうすぐ“彼女”に会える事を考えながら毒沼を笑顔で歩いていたら、毒沼にある浮島のような場所に座る人に声をかけられた。

「おい、アホ弟子。頭は大丈夫か？」

声をかけられた男は声をかけてきた人の方を向いた。

「師匠。もうバカ弟子とは呼ばないんじゃないかなかったのでは？」

「ああ。だからバカとは呼んでないだろ。毒沼を笑顔で歩く奴はバ

力ではなくアホだ」

「ひどいな。別に毒沼を歩くのが好きな訳ではないですよ」

「笑顔の原因はどうあれ、はたから見れば毒沼を笑顔で歩くアホにしか見えんよ」

男は笑顔を保ったまま師匠と話し、ロープについたフートを深々とかぶって顔を隠す師匠の表情こそ見えないが、声は実に楽しそうだった。

「それで、師匠。“彼女”に会う決心はつきましたか？」

「まだ、だな。今更どんな顔をして会えばいいのか……」

男は毒沼につかたまま話すのもなんだと思い、毒沼から上がり、師匠は声を曇らせて顔をふせた。

「大丈夫ですよ！ 師匠。“彼女”は目が見えないみたいですから、どんな顔をしていても大丈夫ですよ！」

「……ふう。会わせる顔がない。の意味くらい分かるよな？ アホ弟子」

明るく話す男につられたのか、師匠はあきれながらふせていた顔を上げて男を見た。

「師匠がいつまでたっても“彼女”に会う決心がつかないと、いつか俺が“彼女”の体を治して師匠の前に連れて来ますよ？」

「それは……いや、しかし……」

「しかしもかかしも無しですよ。師匠は毎回あくどくだと色々言いますが、一度だって「会いたくない」とは言わないじゃないですか！ 行きましようよ。今なら俺がついてますよ！」

「わ、私は………会いたい。確かに私は会いたいさ！ でも……」

「はい。「でも」も無し！」

「！ お、おい！ おろせ！」

いい加減このまま話しても話が進まないと思った男は師匠を横抱き……つまり、お姫様抱っこをし、それに驚いた師匠は燃える拳（呪術の火）を男に叩きつけた。

「はいはい。行きますよ」

「おろせと言ってるだろ！ このバカ弟子が！」

師匠を抱き上げた男は毒沼を渡りだした。

師匠は再び燃える拳を叩きつけて男を焼いたが、男はそれを気にせず毒沼を進む。

「いくら俺でも女性を毒沼にはおろせませんよ。渡るまで待って下さい」

「っち。言っようになっとな」

「そういえば、師匠。“彼女”とはどういう関係で？」

「お前は……それも知らずに無理やり会わせるつもりだったのか？」

男は前を向きながら師匠に話しかけ、師匠は男にあきれながら返事をした。

「ええ、そうですよ。師匠の反応を見る限りは安全そうですし」

「ふん。まったく……姉妹だ」

「え？」

聞こえなかったのか驚いたのか、男は歩きを止めずに勢いよく師匠に視線を向けた。

「どうしたアホ弟子。耳が悪くなったか？」

「え、いや……姉妹？」

「姉妹だ」

男は驚いた表情を浮かべながら師匠の体を色々見ると、男の視線に気がついた師匠は、顔を隠すフードを下に引いて顔を完全に隠し、両手で自分の体を抱いて胸を隠す。

「な、なんだ？ このアホ弟子が。じろじろ見るんじゃない！」

「え、いや……似てないな、と思ひまして」

流石に男もそんな動きをした女性を見るのは失礼だと思い、前を

向いて視線を外した。

「な！ 私が美人じゃないと言うのか！？」

「ええ！？」

男は師匠がそう返して来るとは思っていなかったので驚き、何故かヒートアップした師匠がどんどん口を開く。

「昔は私達姉妹が全員揃ったら美人姉妹集団と言われた事もあるぞぞ！」

「え！ いや、そんなの知りませんよ。後：俺は師匠の顔を一度だつて見たことないですし、美人じゃないとは言っていないですよ！ あ、つきましたよ」

色々話している間に毒沼を渡りきり、男は師匠を地面に下ろした。

「つく！ では、どこが似てないと言うんだ！……うむ。ご苦労」

地面に立った師匠は体を軽くはたき、フードを深くかぶりなおした。

「美人かどうかではなくて体つきが……あ、いや！ 体型とかの話ではなくてですね！ 師匠は普通に人の形をしています。彼女”の下半身はどう見ても人間ではなかったから！」

男は「体つき」の辺りが失言だと気がついたので焦って一気に話した。

「！ 下半身が、人間じゃなかった？」

「え、ええ！ クモと言えば良いのか虫と言えば良いのか分かりませんが、人間じゃなかったですね」

「そう、か。……先に行ってください」

「え、いやいや。一緒に行きましょうよ」

男が先に数歩進んだ状態で振り返り、手招きをする。師匠は顔を伏せて首を振る。

「ここまで来て「会わない」とは言わないさ、ただ、心の準備くらいさせてくれ」

「ん〜……分かりました。先に行って待ってますよ。でも、あまりに遅いと迎えに来ますからね」

「分かった分かった。とつとつと行け！」

男は静かに振り返ると歩きだし、師匠は男の姿が見えなくなった。口を開いた。

「「下半身が人間じゃなかった」か。目が見えないのは聞いていたが……ふう。ままならないものだな」

師匠は空を見上げてため息をついた。

師匠を置いて先に行った男が笑顔で道を歩いていると、普段背中に卵を背負って寝そべり、両手を合わせて祈る変態不死者達が死んでいた。

「ん？ 誰か来たのか？」

不死者達は手足を切られ、頭を潰され、背中の卵がめちやくちやに潰されていた。

それを見た男に変化はなく、ただ道を塞ぐように倒れていた不死者を1人蹴り飛ばした。

「普段なら無視だが、後から師匠が通る予定だ。道を塞ぐんじゃない」

不死者に微塵も優しくない男は、道を開けたら不死者達を無視して先に進んで行った。

久しぶりに“彼女”に会える男は、満面の笑みを浮かべながら階段を降りている途中で足を止めた。

「なぜ、開いている？」

男は普段毎回ちゃんと閉めている隠し扉が開いているのに疑問を持ち、嫌な予感がした男が隠し部屋に走ると、“彼女”の前に真っ黒な鎧を全身に着込む人がいた。

「え？」

真っ黒な鎧は頭から足までびっしりと棘の生えている珍しい鎧で、

よく見ればその手に持つ直剣と盾も真っ黒で棘が付いていた。

「姉……さん」

男を見つけた“彼女”は片手を男に伸ばした。

男の視界には入っていないが、棘の騎士の足下には両足を切られ、背中の卵を潰され、自分の手に棘が刺さるのも気にせず棘の騎士の足にすがりつき、頭を潰されている不死者がいた。

「なんだてめえは。見せ物じゃねえんだよ」

男が固まった一番の理由を作った棘の騎士は、“彼女”に刺さっている直剣を引き抜いた。

「キサマア！」

ようやく動き出した男は黒騎士の大剣を取り出し、地面に火花を散らしながら高速で棘の騎士に近付くと、下から振り上げた大剣で棘の騎士を吹き飛ばした。

「お、おい！ 大丈夫か？」

男は大剣を地面に刺して両手を離し、“彼女”の状態を見て顔を青ざめた。

「姉さん……良かった。無事だったんだね」

「おいおいおい！ 待て、待ってくれ！」

男は“彼女”の声にも反応せずに、“彼女”の周りに急激に増え

る光の粒子に目を向けていた。

「わたし…は、いいから……にげて」

「止まれ止まれ止まれ！」

その光に包まれる現象は、男が今まで何度も見てきた“デーモン”の最後だった。

「ねえさん……げんきで、ね」

「待ってくれ!!」

男の願いは叶わず、“彼女”の姿は消え、“彼女”の居た場所には“彼女”の気配を感じるソウルの塊だけが残された。

「いってえな。いきなり何しやがる」

かなり遠くに飛ばされた棘の騎士が立ち上がり、棘の直剣を男に向けた。

男は両目から流れる涙を乱暴に拭いて立ち上がり、新たに取り出した二本の槍を交差するように斜めに刺して、唯一の出入口を塞いだ。

「おい、どうした？ 喋れないのか？」

「キサマだけは……」

男は更に大量の剣や槍を出したら“彼女”のソウルの周りに突き立てて壁にした。

「あ、なんだって？」

「キサマだけは！」

男はカアスからもらった剣を取り出し、棘の騎士に向かって水平に投げつけた。

「あぶな！」

棘の騎士は飛んできた剣を盾で受けて流し、剣はそのまま後方の壁に突き刺さった。

「キサマだけは殺す！ 不死者だろうが殺す！ 生き返れなくなるまで殺してやるは！！」

男は両手に武器を取り出したら両手を広げるような構えで近付き、棘の騎士は左手の盾を前面に押し出すような形で突進をする。

男の戦法はかなり変わっていて、両手の武器を投げたり、捨てたり、地面や壁に刺したりとすぐに武器を変える。

対して棘の騎士は武器を手放すような事はしないが、全身の棘を利用してしようとする戦法は特殊で、体当たりや蹴り、更には盾で殴ったり直剣を持つ手で殴ったりもしてきた。

しばらくすると武器をすぐに手放す男の戦い方のせいで戦場はあつと言つまに剣や槍、斧や槍斧といったもので溢れ、足場を狭くし、道を塞ぐ。

しかも男は手放した武器を蹴り飛ばしたり拾ったりもするのだからが悪く、少しづつ棘の騎士が壁に追い込まれていた。

そして、壁に追い込まれた棘の騎士が持つ直剣が男を突き刺し、更にひねって抜こうとした棘の騎士の腕を男が掴み、男は右手に持っていた剣を棘の騎士に突き刺した。

内容的にはお互いの武器が相手に刺さる相討ちだが、男は棘の騎士に刺さった武器をあっさり手放し、次の武器を取り出す。

棘の騎士は捕まれた右手を必死に引くが男は手放さず、左手は腹に刺さった武器を抜こうとするが、壁にまで貫通していた剣を抜く前に男が剣を振り下ろす。

男の振り下ろした剣は棘の騎士の左腕を切り落とし、男は左手に着けていた呪術の火から炎を生み出し、棘の騎士の右腕と自分の左手をまとめて焼き尽くした。

「デメエ、顔は覚えたからな！ 次は俺がお前を殺してやる！」

棘の騎士の言葉を見殺した男は右手の剣を棘の騎士の足に刺して離し、黒い何かを右手から拵げながら棘の騎士の頭を掴んだ。

「な、んだ。これ？」

頭を捕まれた棘の騎士は最初こそ鋭く男を睨んでいたが、今まで大量に奪ってきた人間性を盗られているのに気付き、顔が恐怖にそまり始めた。

「おい！ 止める！ 殺すのなら早く殺せ！」

「安心しろ。盗るもん盗つたら殺してやるから」

男の右手から発する闇が勢いをましていき、しばらくすると棘の騎士が気を失ったので男は棘の騎士から手を離し、棘の騎士が持っていた直剣　棘の直剣を引き抜いたら棘の騎士に突き刺した。

「武器は返してやるよ」

棘の騎士に棘の直剣を刺して止めをさした男は、棘の騎士に刺さっている棘の直剣以外を回収し“彼女”が居た場所に向かい始めた。

普段なら戦闘が終わつたら使った武器をすぐにすべて回収するのだが、今日は“彼女”が居た場所に向かう道を塞ぐ武器だけを回収していた。

さっきまで元気だった男だが、“彼女”の事を思い出したら泣き出し、涙も拭かずに“彼女”のソウルの前に立った。

「……………あ、くそ」

“彼女”のソウルに手を伸ばした男だったが、ある事に気が付き、手を引いて体の横まで戻したら手を強く強く握りしめた。

「俺は……………“彼女”の名前を知らないままか」

初めて会った時から男を見て嬉しそうに「姉さん」と呼ぶ“彼女”に、男は名前をたずねる事が出来ず、“彼女”の近くに居た不死者は“彼女”の事を「姫様」と呼んでいたので愛称すら知らなかつ

た。

落ち込んでいた男の元に、

「おい、アホ弟子。この武器の数々はなんだ？」

ゆっくり歩いてきた師匠が追い付いた。

「師匠……」

師匠は数々の武器の隙間を通って男に近寄っていき、“彼女”のソウルを見つけて固まった。

「おい、まさかお前」

師匠は“彼女”のソウルを指差し、

「コレに人間性を捧げていたのか？」

無言で頷く男に、師匠は呆れて息を吐いた。

「いくら自己を保っているソウルとはいえ、人間性をいくら捧げても復活は無理だぞ」

男は驚いて顔を上げて口を開いた。

「違う！ さっきまでは生きてたんだ！」

「うん？ ソウルに人間性を捧げていた訳ではないのだな？」

男は大きく頷いたら再び泣き出し、後ろの壁を叩き出した。

「くそ！ くそお！」

「ふくん？ 状況がよく掴めんな……弟子がこの調子じゃあ説明は期待できないしな」

師匠は男の様子を見たらしばらく放置する事にし、“彼女”のソウルに手を伸ばして調べ始めた。

「……………ほほう。うん。いけるか？ いや、どうだろうな。ソウルが足りるか」

ソウルに触れながら一人言をいていた師匠は、振り返って見た男の様子が変わっていないのにため息をつき、大声で弟子を呼んだ。

「おい！ アホ弟子！ ソウルを少し貸せ！ どうせいっぱい持ってるんだろ？」

師匠の声を聞いた男は壁を叩くのを止め、涙を拭いて振り返った。

「師匠……ソウルはもう必要ないって言ってませんでしたか？」

「それとこれとは話が別だ！」

男はふらふらしながら師匠に近寄っていくと、地面に刺さっていた剣の1つに足を捕られてその場で派手に転んだ。

「おい、大丈夫か？」

「師匠……」

男は地面に倒れたまま顔を上げて師匠を見ると、また泣き出した。

「う、う……師匠。不死者の殺して方を知りませんか？」

「聞いてどうする？」

「もちろん、自殺のためですよ」

「ふう〜知らん！ どうせ死ぬ気なら最後に私の実験に協力しろ！」

師匠は男の目の前に立ち、男は顔を上げる気力も無くなって顔を横に向けた姿勢で倒れていた。

「いやですよ。もう何もかもどうでもいいです。一人で頑張ってください」

「っち！ アホ弟子！ よく聞けよ！ 実験内容は“ソウルのみになった存在に肉体を取り戻せるか？”という内容だ」

「？」

「このアホ弟子が！ 分からないのなら簡単に説明してやる。お前の言う“彼女”を蘇らせるかもしれないから大量のソウルをよこせと言っているんだ！」

「え？ マジ？」

男は突然元気になって体を起こしたが、代わりに師匠の頭に「？」

「マークが浮かんだ。」

「まじ？ とはなんだ？」

「え！ 本当ですか？ って意味です」

「ああ、本当だ。ただな、理論だけならとうの昔に完成していたが、実際に行くのは今回が初めてでな。ソウルがどれくらい必要になるか検討もつかん」

男は元気に立ち上がって左手を師匠に差し出した。

「そういう事ならいくらでも使って下さい！」

「うむ、では少し貰うぞ」

師匠も左手を出して男の左手を掴み、二人共目を閉じたと思ったら突然師匠が炎を上げる右手で男を殴った。

「このバカ弟子が！ 私を殺す気か！？」

「え？ ええ？ そんなつもりは微塵もありませんが？ いちいち燃やすの止めて下さいよ」

男は殴られて焦げた部分をさすり、師匠に抗議の声を上げたら更に殴られた。

「ええ〜い。やっぱりお前はバカ弟子だ！ こんな大量のソウルを突然注ぎ込まれたら普通死ぬぞ！」

師匠は肩で息をしながら男を睨む。

「え？ ソウルって大量に注ぎ込んだら死ぬもんなの？ あと、大量って言うてますがまだ1割も渡してないんですけど…」

「はあはあ……この、バカ弟子が。まあいい、手を握って回線を開いとけ、足りなかったら私がお前から勝手に取るから」

「はあ、分かりました」

男は師匠の左手を掴んで目を閉じ、師匠は右手を“彼女”のソウルに手を伸ばして目を閉じた。

「む」

「うん？」

師匠の声に過剰反応した男が目を開くと、“彼女”のソウルの周りに大量の光の粒子が飛び散っていた。

「おお！ 師匠、成功ですか！？」

師匠は目を閉じたまま左足で男に蹴りを入れた。

「いって、何を……」

「黙ってる！ 気が散るだろうがこのバカ弟子が！！」

「すみません」

男は師匠が目を閉じたままでも何も見えないというのに頭を下げ、

謝ったら目を閉じてうつむき口を閉じた。

何もしていない男としては長い時間。実際には一分も経つ前に師匠が動く許可がおりた。

「もう良いぞ」

「おけ」

男が目を開けると、目の前には元気な姿の“彼女”がいた。

「おおおー！」

男が喜びの声を上げていると、“彼女”が師匠に目を向けた。

「……クラねえ？」

「クラねえは止める」

「やっぱり、クラねえだ！ ほらほら姉さん。クラねえだよ……あれ？」

師匠との会話で嬉しそうな声を上げた“彼女”は、男の方を見て「姉さん」と呼んだが、固まって首をかしげた。

「あれ？ あれえ？ ねえねえクラねえ。姉さんは？」

「姉さんじゃ分からんな、何姉さんだ？」

「クラ姉さんだよ！ クラねえ！」

「はあ……まあいい。誰かは分かったから。私は見てないよ」

「ええー！ さっきまここに居た気がしたんだけどなー？」

なんだか口を挟めない男は、黙って元気な“彼女”を見て嬉しそうに笑っていた。

「ん」と

目を閉じた“彼女”は手を上げ、ゆっくり手を下ろしたら男を指差し目を開けた。

「ほら、ここにクラ姉さんが！……あれ？」

指差された男は後ろを見たが誰も居らず、男が前を向くと再び“彼女”は可愛くうなりながら目を閉じていた。

「うん……」

また“彼女”の手が男を指差したので男が横に移動すると、“彼女”の手が後を追う。

「なんだ？」

「うん」

男が更に横に移動しても“彼女”の指先は男を指差し、訳の分か

らない男が速度を上げて突然反対方向に移動したら“彼女”の指先が止まったが、ゆっくりと男の後を追って止まっている男に追い付くと動きを止めた。

「ほら！ 今度こそクラ姉さんが……？ いないねえ？」

「おい、バカ弟子」

「なんですか？」

静かに二人の様子をうかがっていた師匠が、何かに気づいたので男に話しかけた。

「何か“自己”を保っているソウルを持っていないか？」

「いくつかありますが……それが何か？」

「おかしいな。確かにクラ姉さんの気配がするだけだな」

「まあ、出せ。全部出せ。話はそれからだ」

「はあ？ 分かりました」

男がうつむいて手を伸ばすと、1つづつ順番にソウルが出てきて衛星のように男の周りを回り出した。

「ふむ……これだな」

師匠はソウルを1つ掴むと男から離れた。

「それで話は？」

「まあ、簡単な話でな」

「うん。そこ！」

二人の話を聞いていない“彼女”が今度は師匠を指差した。

「あれ？ クラねえだ」

「まあ、こついう訳だ」

「どついう訳？」

男は頭に疑問符を浮かべながらソウルを出すの止めて、ソウルでお手玉をしだす。

「おい」

「なに？ クラねえ」

「もう一度「クラ姉さん」を指差してみる」

「うん」

師匠は“彼女”が目を閉じて師匠を指差すのを見たら、手に持つソウルを直接触らずに空中を移動させ始めた。すると“彼女”の指先がソウルの後を追いつ始める。

「つまり、このソウルがコイツの言う「クラ姉さん」と言う訳だ」

師匠は「コイツ」と言った時に“彼女”を指差し、空中を移動させていたソウルを手元に戻した。

「はい！ここにクラ姉さんが！……あれ？」

「なるほど。つまり俺が「お姉さん」と言われていたのはそのソウルのせいか！」

「そう言う訳だ。それでな、このソウルも復活させたいから大量にソウルを出しな」

「え？ 嫌ですよ」

即座に嫌がる男に対して師匠は、

「これが復活したら喜ぶだろな」

師匠は意味ありげに“彼女”を見る。

「マ・ジ・で！？」

「うむ、まじだ」

男が喜んで師匠にソウルを捧げると、師匠は手を振って移動しました。

「師匠？」

「私はこれを上で復活させてくる。二人っきりにしてやるから色々

話ときな」

「はい！　ありがとうございます！」

「あれ？　クラねえどこ行くの？」

「少し散歩してくる。暇ならその男と話してろ」

男は頭を下げて師匠が去るの見送り、“彼女”は師匠と男を交互に視線を動かしていたが、師匠が居なくなると男をしっかりと見た。

「あの？」

「なんででしょうか？」

男に“彼女”が先に話し掛けた。すると男は下げていた頭を勢いよく上げて“彼女”を見る。

「あなたの名前は？」

「俺の名前は」

男は嬉しかった。「やっと自己紹介が出来た」と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7322z/>

ダークソウルの最後(闇の王編)

2011年12月24日09時48分発行